次世代へ、大いに語ろう！

保育科生の講義で出欠を取るのを兼ね、毎回、最後の１５分ぐらいに授業で印象に残ったこと等の感想を提出して貰っています。その中から、つくづく、親に勝る教育者はいないと実感せざるをえないものをいくつか記載します。これらを読むと、「今の若い者は…」と評する前に、大人（親を含め）が自分の色んな体験を次世代にもっともっと語った方がいいのでないかと考えさせられます。

①（生命の誕生、大切さ等に触れた授業の後に、親宛のメッセージをテーマとしての感想から。）

「私が生まれる時、両親は医師から『子どもを産めば母親は死ぬかもしれない。子どもが産まれても障害があるかも知れない。』と云われたとか。でも、母は父に『自分はどうなってもいいから、あなたの子どもを産みたい。もし障害があっても私の代わりにこの子を育てて！』と父に云ったところ、父は『うん』と頷いたと聞いています。母も無事だったし、自分もこうして今大学に学んでいるのも、こうした両親のお陰。産んでくれてありがとう。」

②（乳幼児の発達過程や『人間』としての大切な要因に触れた授業の後の感想から。）

「私の母は、幼い頃から『笑っていると周りの人を幸せにできるのよ。それを見て貴女も幸せになることができるの。どんな時も笑顔を絶やさないでね！』と云っていました。そのお陰で私はとても笑顔を大切にできるようになりました。母が私に、生きる上で歩くことと話すことと同じぐらいに、笑顔が大切だということを教えてくれたのだなあと感じています。」

③（人間を対象とする仕事は真のエリートな仕事等に触れた授業の後の感想から。）

「私の母は、老人ホームで働いています。『私にはこの仕事が合っている。この仕事以外は何もできないけど』と云っている母をみて、本当に好きなことをやっているのだなあと思い、そんな母がとても強く感じました。明日のたくさんの場面を想定して、衣服の着替えなどを自分自身で試している母を見て、好きなことを仕事にしている人はカッコイイなあと思いました。」

（2003 年 01 月 05 日　記）